



今年 7 月、北京大学のサマースクールに参加した。初めての留學生活。初めての中国。そして、多くの友。これらすべてが、大学 4 年間で過ごす中で固まりつつあった私の価値観に「打撃」を与えた。そして、頭で理解したのではなく体で感じた、この経験こそが本当の意味で自分の血となり肉となるのだ。

1. 自分は世界基準で「市場価値のない」人間だ

幸いにも就職先が決まっていた 7 月。就職活動の中でそれなりの「市場価値」があるとの評価を受けたからこそ「内定」、それが自分の存在価値を認めてくれるものの一つであった。しかし、その自信は脆くも崩れ去った。日常会話と議論で必要な英語レベルの差に愕然とし、自分の考えが伝えられないもどかしさ、英語が流暢ではない私に対してだけ「ゆっくり」話してくれる友人の気遣いさえも私にとっては重荷に感じた。授業で教授に指名されるも、まともに答えることができなかったときの羞恥心、無力感、落胆。友人同士の会話の輪に入れないことへの悲嘆、疎外感、孤独感。「英語は大切」。標語のようなこの言葉を留學前にも信じて疑うことはなかったが、この事実をまさ

にたたきつけられた。「話す」というコミュニケーションの大前提さえできない人間は、市場価値、ましてや存在価値さえない。グローバル社会といわれる現在、経済活動だけではなく労働市場もグローバル化しつつある。そういった中で、自分と同じくらいあるいはそれ以上に優秀で、かつ賃金の安い途上国の人たちとの競争に自分は勝ち残れるのか。現段階ではYESとはとても言えない。

2. 自分の言葉で何か語れるか

自分はこれまで「早く働きたい」「早く社会にでたい」と思っていた。しかし、学生生活も残り半年をきった今の自分に必要なのは「動くことではなく、座って学ぶこと」だと気付いた。友人に日本について質問されたときに深い回答をできているか・新聞の社説をなぞっただけではないのかと自分に疑問を持ったこと。そして、友人たちの多くが院でより専門知識を学ぼうと考えていることに刺激を受けた。今の日本では学びよりも経験が重視されているように思う。就職活動でも何を学んだかよりも何を経験したかを聞かれ、「学生起業家」がメディアでもてはやされる。私自身も大学4年間の多くの時間を、学びよりも経験に向けてきた。これが完全に間違っていたとは思わない。しかし、バランスを欠いてしまったかとも思う。確かに専門知識が実務に直結するかといえば、直結する仕事は少ない。哲学者の木田元氏がある記事で、自分の頭でだけ考えることには限界があると書かれていた。「考えられて書かれた書物をじっくり読むことによって初めて、思考力は鍛えられる。」専門知識を学ぶというのは表層的な一面であって、深層には思考力という普遍的な力を鍛えることが、学生にとって本当に必要なことなのだ、と遅ればせながら気付いた。そしてその思考力に則って、自分の頭で考え、自分の言葉で語ることこそが、一個人として価値を創造することにつながる。

3. 自分の道は変わらない。でも、道のひき方は変えられる。

留学したからといって、自分の将来は変わらない。ただし、その将来に向けての自分の取り組み方は変えられる。たった残り半年で、これからやらなければいけないことが見えてきたため、焦燥感を感じながらの帰国であったが、自分の価値観における大きな変化を感じた。

このような機会を与えてくださって、非常に感謝しております。ありがとうございました。